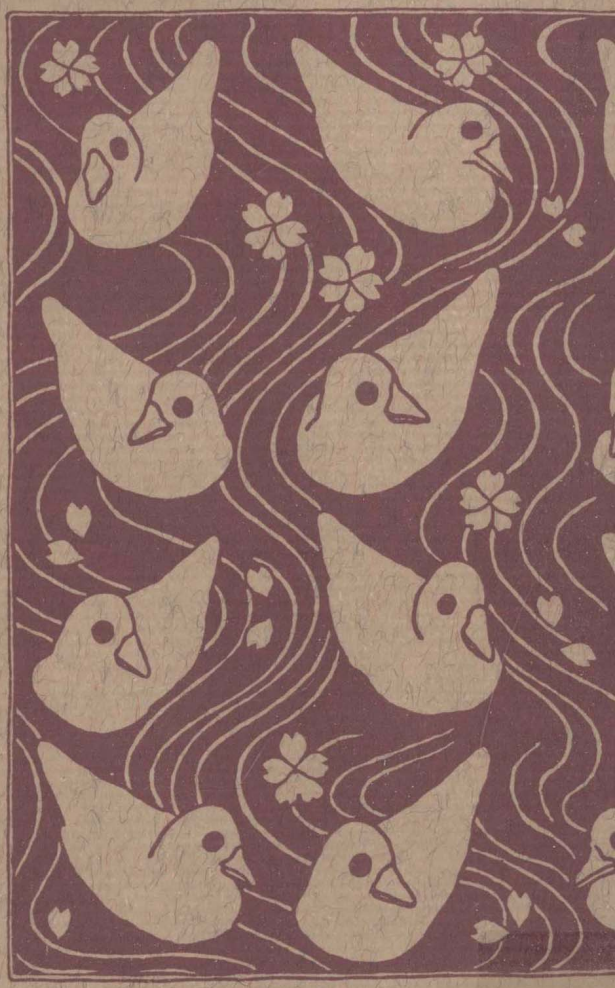
すみだ川



すみだ川

永井荷風著

すみだ川版歴

明治四十四年三月二日印刷
明治四十四年三月五日發行
明治四十四年八月十日第二版發行
明治四十五年二月十八日第三版發行
明治四十五年五月二十日第四版發行
大正二年三月三十日第五版發行
大正四年九月廿二日改版印刷
大正四年九月廿五日改版發行

毎冊此印

大正四年九月廿二日印刷
大正四年九月廿五日發行

すみだ川　定價金參拾錢

著作者　永井壯吉
東京市麹町區有樂町一丁目一番地

發行者　籾山仁三郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷者　植田庄助
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　籾山書店
東京市麹町區有樂町一丁目
（丸の内三菱二十一號館）
振替東京二四一七番
電話本局二一三二番

第五版すみだ川之序

小説すみだ川を草したのはもう四年ほど前の事である。外國から歸つて來た其當座一二年の間は猶かの國の習慣が拔けないために、毎日の午後といへば必ず愛讀の書をふところにして散歩に出かけるのを常とした。然しわが生れたる東京の市街は既に詩をよろこぶ遊民の散歩場ではなくて行く處としてこれ戰亂後新興の時代の修羅場たらざるはない。其の中にも猶わづかにわが曲りし杖を留め、

疲れたる歩みを休めさせた處は矢張いにしへの唄に殘つた隅田川の兩岸であつた。隅田川は其の當時目のあたり眺める破損の實景と共に、子供の折に見覺えた朧ろなる過去の景色の再來と子供の折から聞傳へてゐたさま〳〵の傳說の美とを合せて、云知れぬ音樂の中に自分を投込んだのである。既に全く廢滅に歸せんとしてゐる昔の名所の名殘ほど自分の情緒に對して一致調和を示すものはない。自分はわが目に映じたる荒廢の風景とわが心を傷むる感

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

激の情とを把つてこゝに何物かを創作せんと企てた。これが小説すみだ川である。さればこの小説一篇は隅田川といふ荒廢の風景が作者の視覺を動かしたる象形的幻想を主として構成せられた寫實的外面の藝術であると共に又この一篇は絶えず荒廢の美を追究せんとする作者の止みがたき主觀的傾向が、隅田川なる風景によつて其の抒情詩的本能を外發さすべき象徴を搜めた理想的内面の藝術とも云ひ得やう。さればこの小説中に現はされた幾多の叙

景は篇中の人物と同じく、否時としては人物より以上に重要なる分子として取扱はれてある。それと共に篇中の人物は實在のモデルによつて活ける人間を描寫したのではなくて、丁度アンリイ・ド・レニエーがかの「賢き一青年の休暇」に現したる人物と齊しく、隅田川の風景によつて偶然にもわが記憶の中に蘇り來つた遠い過去の人物の正に消失せんとする其の面影を捉へたに過ぎない。作者はその少年時代によく見馴れた此等篇中の人物に對していかな

る愛情と懷しさを持つてゐるかは云ふを俟たぬ。今年花又開くの好時節に際し都下の或新聞紙は墨上の櫻樹漸く枯死するもの多きを說く。嗚呼新しき時代は遂に全く破壞の事業を完成し得たのである。さらばやがては又幾年の後に及んで、いそがしき世は製造所の煙筒叢立つ都市の一隅に當つて嘗ては時鳥鳴き蘆の葉さゝやき白魚閃き櫻花雪と散りたる美しき流のあつた事をも忘れ果てゝしまふ時、せめてはわが小さきこの著作をして、傷ましき時代

が産みたる薄倖の詩人がいにしへの名所を弔ふ最後の中の最後の聲たらしめよ。

大正二癸丑の年春三月小說すみだ川幸に第五版を發行すると聞きて

荷風小史

すみた川

一

何かの用事で今年の盆にはとう〳〵行かずにしまつた處から、俳諧師の松風庵蘿月は今戸で常磐津の師匠をして居る實の妹をたづねて見たいと毎日さう思つてゐた。けれども流石日ざかりの暑さには家を出かねて、夕方の來るのを待つ。夕方になると竹垣へ朝顔をからましたの勝手口で行水をつかつた後、其のまゝ裏裸體で晩酌を傾け、やつとの事で膳を離れるので、七月の黄昏も家々で焚く蚊遣りの烟と共にいつか夜になつて、盆栽を并

べて簾をかけた窓外の往來に下駄の音、職人の鼻歌、人の話聲が賑に聞え出す。蘿月は其から直ぐに今戸へ行くつもりで格子戸を出るけれど、其の邊の涼臺から聲をかけられるがまゝに腰を下すと、一杯機嫌の話好きに、いつも極つて八時か九時の時計を聞いては吃驚するのであつた。

朝夕がいくらか涼しく樂になつたかと思ふと共に、大變に日が短くなつた。毎朝起きて見るたびに竹垣に咲く朝顏の花の輪が小くなつて、西日が燃る焰のやうに狹い家中へ差込んで來る時分には、近所一面に啼く蟬の聲が特更に調子急しく聞える。八月も半ば過ぎてしまつたので、竹垣を越して裏手の玉蜀黍の畠に吹き渡る風の響が、夜なぞは折々雨かと誤たれた。蘿月は

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

若い時分にしたい放題身を持崩した道樂の名殘で、時候の變り目といへば骨の節々が痛むので、いつも人より先に秋の來るのを感じる。この感覺は朧ながらにも、月日が流れる水のやうに過ぎて行くと云ふ寂寞の念を誘ふと共に、半分は居眠つてゐる世外の人の心にも、何か知ら或る判斷を促す。蘿月は丁度八日頃の夕月がまだ眞白く、夕炎の空にかゝつてゐる頃に、小梅瓦町の住居から今戸をさして歩いて行つた。

曳舟通りに添ふ堀割を傳つて、直ぐさま左へまがると、土地のものでなければ到底分らないほどに迂曲した小徑が、三圍稻荷の横手から向島の土手へと通じて居る。小徑に添うては、新しく田甫を埋めたてゝ、まだ人の借りない貸長屋を建た處もあ

る、廣々した構への外には大な庭石を据并べた植木屋もあれば、全くの田舍らしい芽茸の人家のまばらに續いて居る處もある。その竹垣の間からは夕月に行水をつかつて居る女の姿の見える事もあつた。蘿月宗匠はいくら年を取つても昔の氣質は變らないので、見て見ぬやうに窃と立止るが、大概はぞつとしない女房ばかりなので、がつかりしたやうに歩調を早めて、自分には損も德もない貸長屋だの賣地の札を見る度びに、今度は其の方の胸算用をして、自分も何か懷手で大儲をして見たいと思ふ。然し又、歩いて行く小徑が田甫の中へ這入つて、青々した稻の葉に夕風がそよぎ、蓮田の蓮に美しい花の咲亂れて居るのを見れば、流石は商賣柄で、記憶に散在してゐる古人の句を巧いも

のだと思返すのであつた。

土手へ上つた時には葉櫻の陰は已に暗くなつて、水を隔てた人家には灯が見えた。吹きはらす河風に暑中に黄んだ櫻の枯葉がはら〳〵散る。休まず歩きつゞけた暑さにほつと息をついて、ひろげた胸をば扇子であふいだが、まだ店を仕舞はずにゐる休茶屋を見付けて、慌忙て立寄り、「おかみさん、冷で一杯。」と腰を下した。夕炎の川向うに待乳山と金龍山の五重の塔を眺めて、都鳥の浮き沈みする隅田川に帆かけた舟の通つて行く名所の景色が、江戸氣質の風流心を動すにつれて、酒なくて何の己れが櫻かなと、宗匠は急に一杯傾けたくなつたのである。

休茶屋の女房が緣の厚い底の上つたコップについで出すのを、

蘿月は飲干して其のまゝ竹屋の渡船に乗つたが、丁度河の中程に來た頃から、靜な身體の動搖につれて冷酒が追々にきいて來るのを覺えた。葉櫻の上に輝き初めた夕月の光がいかにも涼しい。滑な滿潮の河水は「お前どこ行く」と唄の文句にある通りいかにも投遣つた風に、心持よく流れてゐる。目をつぶつて獨りで鼻唄を唄つた。

向河岸へつくと、急に思出して近所の菓子屋を探して土產を買ひ、今戸橋を渡つて眞直な道をば自分ばかりは足元の確なつもりで、實は大分ふら〳〵しながら歩いて行つた。

名物の今戸燒を賣る店の其處此處に見られる外には、何處も同じやうな場末の横町の、低くつゞいた人家の軒下には話しな

がら涼んで居る人の浴衣の白さが、薄暗い軒燈の光に際立つばかり、あたりは一體にひつそりして何處かで弋の吠える聲と赤子のなく聲が聞える。天の川の澄んで見える空に高く、茂つた樹木の立つてゐる今戸八幡の前まで來ると、蘿月は間もなく幷んだ軒燈の間に常磐津文字豐と勘定流で書いた妹の家の灯を認た。家の前の往來には人が二三人も立つて、内なる稽古の歌を聞いてゐた。

折々恐しい音して鼠の走る天井から、ホヤの曇つた六分心のランプが下つて、ところ〴〵寶丹の廣告畫や都新聞の新年附錄の美人畫なぞで、その破れ目をかくした襖を初め、飴色に古色

を帶びた簞笥から、雨のしみの傳つた鼠色の壁なぞ、八疊の座敷一體をいかにも薄暗く照して居る。古ぼけた葭簀の障子を片寄せた椽側の外は、庭があるのかないのか分らぬほど眞暗で、軒先の風鈴と共に蟲籠の鈴蟲が細く啼きつゞける。師匠のお豐は緣日ものゝ植木鉢を幷べ、不動尊の掛物をかけた床の間を後にして、べつたり坐つた膝の上に三味線をかゝえて、撥の撥で時々前髪のあたりをかきながら、間調子の聲をかけては彈くと、稽古本を廣げた桐の小机を中にして此方には、三十前後の番頭らしい男が中音で、

そりや何を云はしやんす、今さら兄よ妹と云ふに云はれぬ

戀中は……

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com